

令和 元年 9 月 13 日現在

機関番号：32675

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2016～2018

課題番号：15KK0059

研究課題名（和文）18～20世紀の糸・布・衣の廉価化をめぐる世界史（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Globalization of Dress. Perspectives from Japan 1600-2000(Fostering Joint International Research)

研究代表者

杉浦 未樹 (SUGIURA, Miki)

法政大学・経済学部・教授

研究者番号：30438783

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 5,300,000円

渡航期間：13ヶ月

研究成果の概要（和文）：日本に関連した衣のグローバルな循環を、一六～一八世紀の近世期と一九二〇年～七〇年の二つの時期に分けて描きだした。近世期は、小袖とヤボンセ・ロック、パニヤン等の連環に関する共同研究を進めた。また、オランダ東インド会社がアジア産の簡易服を大量循環させ、それと呼应しながらケープ植民地で安価な奴隷衣が流通したことを示した。二〇世紀では、日本製品が東西アフリカの晴れ着と下着の双方の形成で重要な役割を担ったことについて、史料収集・整理・分析を行った。この時期に拡大した循環として、スポーツウェアと古着や染め直しに注目し、日本の果たす役割を位置づけた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の社会的意義は、近世期に日本以外の国々が日本の衣に親しみ、模様・スタイル等で一部分がった衣をまとい、また二〇世紀に日本製品が遠く東西アフリカの人々のまとう衣の動向に影響を与えていたことを示すことにより、日本視点からの衣のグローバル化の検討を行った点である。学術的意義は、衣の世界史を、洋装化の伝播を超えた視点から捉える方法論を提示し、近世期については複数地点の史料を用いアジア産衣料のグローバルな循環を実証したことである。二〇世紀についても、アフリカへの日本製品輸出のインパクトを史料開拓して追う一方、スポーツウェアや古着の新視点から衣のグローバル化をみた。

研究成果の概要（英文）：This project explored globalization of dress from Japanese perspectives of two periods, Early Modern times (1550-1700), and 20th-21st centuries. These two periods have been shed much less light upon compared to the period of 1850-1920, when Japan experienced rapid process of westernization. For the Early Modern Period, the project unveiled interconnections between Kosode, Japanese Rok, Banyan and Quimono, which were produced and circulated involving Japan, China, India, South East Asia, North Western Europe and North and Latin Americas. In addition the project verified mass circulation of Asian produced clothing through the Dutch India Company and clarified the making of slave clothing in Cape Colony amidst the global circulation. For the 20th-21st century, the project analysed Japanese product's entrance and impact on garment formation in East and West Africa in the 1920-1970s. As global circulation enhanced in this period, the project focused upon sportswear and secondhand circulation.

研究分野：経済史

キーワード：服 ファッション 繊維 古着 消費 グローバリゼーション 低廉 オランダ東インド会社

1. 研究開始当初の背景

一九九〇年以降、グローバルヒストリーへの動きが活発化するにつれ、モノの世界史の手法も刷新されてきた。中心からの一方向な伝播や、二地点を対置させる構図が塗り替えられ複数地域の関わりが重視され、競争や模倣とともに共創が探求されるようになった。モノの各地域における受容に関しても、単線的ではなく複線的・重層的に、政治・社会・物質文化の諸側面を融合させながら把握される手法が出てきた。ところが、衣服の歴史では、グローバルヒストリーがあまり展開しているとはいえない。研究分野は、欧米を視点としたグローバルなファッション企業および生産体制の成立や、非ヨーロッパを含める視点では洋装化の歴史に明らかに傾斜している。非ヨーロッパの生産する衣服は、欧米のデザインを模倣したものととらえられ、そうした服がグローバルヒストリーのなかで議論されることは少ない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、もっぱら洋装化を重点に単線的な伝播として語られてきた衣のグローバル化を、1.循環、2.ヨーロッパ基点（洋服のグローバル化）、3.非ヨーロッパ基点とに区分けし、1と3に重点をおいて分析し、多層的に把握することであった。その際、日本の関わったグローバル化を軸におき、時期としては、江戸後期から昭和前期までが研究蓄積が厚いことをふまえ、それ以外の時期に注目し、一六世紀から一八世紀の第一次グローバル化とされる近世期、および一九二〇年から七〇年の二つに焦点を絞った。

3. 研究の方法

この研究の方法論上の独自性は二点にまとめられる。最初が衣服の「循環 circulation」を見出す点である。この研究では、衣の伝播の中心とは従来設定されない地域から衣がどう発信され廻るかを歴史的にとらえ、それを含めると全体の循環はどうみえるのかを描こうとした。たとえば、近世期では小袖を世界的に循環したものととらえ、それと連環される衣服群を明らかにした。さらに、それらの主たる流通媒体となったオランダ東インド会社がアジアの衣をどう循環していたのかをみた。もっとも、循環を強調するあまり、基点が不明瞭にならないように、基点や関わりある地域範囲を現存するオブジェとその関連資料で具体的に検証し、記録史料で遡及して実証するよう努めた。また、新スタイルが到着し導入される初期段階だけではなく、大量普及期、地域内外に再流通していくアフターライフも、循環に組み入れた。

第二は、全体的に高級服よりも低廉な服に着目した点である。小袖やアフリカンプリントは高級な晴れ着にあたるが、それ以外では、奴隷衣という最底辺の服の形成を筆頭に、スポーツウェア、制服、古着などの循環に注目した。衣服が着用者の意図にかかわらず強制されることや、再利用される循環に目をむけ、高級服のアイデアが単純に模倣・低廉化してカジュアルウェアになるという前提や、中心とされない市場には、中心市場の模倣・低廉化された大量生産の商品が流れるという前提から出発しないようにした。

この基金を通じて、関連分野の研究者と効率的かつ実効的に国際交流できた。期間中約一五回のシンポジウムやパネルを主催・共催し、そのうちの7回は後半の海外滞在時に開催した。長期滞在先のウォーリック大学の共同研究パートナーの Giorgio Riello 氏、来日招聘した Jeremy Prestholdt 氏、短期交流を行った DaCosta Kaufman 氏、Linda Easton 氏、申請書には記載されていないがプロジェクトを通じて有意義なご助言と指針をいただいた John Styles 氏、Beverly Lemire 氏、Philip Sykas 氏、シンポジウムや調査開催で協同した鈴木桂子氏、上田文氏、青野純子氏、井戸美里氏、後藤絵美氏、安城寿子氏、森恵氏をはじめ、協力・交流いただいた総勢七〇人にのぼる多数の研究者に厚く感謝申し上げる。

4. 研究成果

(1) 日本服飾織物史と研究蓄積、および世界美術史のアプローチへの接合

日本に関連した衣のグローバル化について、日本服飾史の研究蓄積がある。本研究は、着物とそのデザインの国際化の研究を進める鈴木桂子氏、ならびに機械捺染史を探求する中で京都から輸出されたアフリカンプリントの調査を進めてきた上田文氏をはじめとした日本服飾史研究者と協力し、日本産の服とそれに関連したものが複眼的な循環を生み出すことを探究し実証した。

また、本研究では服をオブジェ単位でとらえ、服そのものや、その製作や所有プロセスにおける交差する文化的要素を読み解く方法論を目指した。そのため地域を縦横する美術品の循環を扱う世界美術史家プリンストン大学のトーマス・ダコスタカウフマン教授のアプローチと交流しようと、二〇一七年夏、教授を招聘し、Global Costume and Global Art と題して三回シリーズのシンポジウムを京都・福岡・東京で開催した。

(2) 近世：日本視点の衣の越境性とアジア産衣のグローバルな循環

このシンポジウムを皮切りに、一六～一八世紀に小袖・バニヤン（英仏北米）・ヤボンセロック（オランダ）・キモノ（中南米）と各地の史料に記された、和装と関連するロングオーバーガウン（長上衣）の連環を、ワークショップ・共同調査を重ねて追究した。その結果、それぞれの越境的な循環が明らかになり、単線的でない服の伝播を表すことに一歩近づいた。現在、青野純子（九州大学）、鈴木桂子（立命館大学）、Ariane Fennetaux (Paris Diderot)、Susan North(V&A)、Adrianna Catena (Warwick)とともに Textile History で Special Issue をま

とめることを目指している。そこで杉浦は、一五八〇年代の天正の少年使節が伊西葡で纏った和装に來日イエズス会士たちが込めた文脈を読み解き、中国絹の循環が拡大し伊西葡と日本の絹事情を変容させていたこと、和装が異物と捉えられながらも、袴が南方ズボンと代替可能と考えられ着装が融合していた経緯を明らかにした。

同時に、一七、一八世紀の間に小袖やパニヤンといった高級服とは別に、オランダ東インド会社がインド・中国産の簡易でカジュアルな服を、バタヴィアなどから大量に本国および他係留地へと循環させていたことを示した。そして、最底辺の服としてケープ植民地の奴隷衣の形成に着目し、そうした循環があったために、店舗の禁止をはじめとした流通制限にもかかわらず比較的安価に奴隷衣が供給できたことを示した。これについて学会発表や招待講演を重ね、成果は英文論文集2つに収められ、近くジャーナル投稿を予定している。

(3) ユニフォーム(制服)と衣のグローバル化

奴隷衣にみられるように、衣の越境や伝播は、消費者個人の意思に必ずしも基づかず、組織的な強制下に大規模に行われた。そこでは、一定集団に課せられ統一と標準性が求められる服、すなわち制服 uniform が創造される。これまでの制服の地域間比較研究は服の形態上の類似や差異や、その制服が生まれる各地域のロジックへ着目した。本研究は、統一性 uniformity を支えた要素を問い直し、その要素がグローバルな生産と流通連環の中でどのように形成されたのかを捉えようとした。例えば、制服の統一性の根幹要素となる「色」について、青・赤・白を中心に染料史家とのシンポジウム、Uniformed Reds and Ordinary Blues. Colours and Clothes in Circulations, c1750-1900 では、衣と染料史を横断して価値形成をとらえ、1840年代に形成された日本の軍服とオランダから輸入した毛織物と藍染料の関係について発表した。

共同研究者 Giorgio Riello 氏の調整で、衣服全般の「価値づけ」について、学術誌 Textile History の50周年にあわせて研究史を回顧する機会を得た。イギリスで研究の厚い貧民給付された服などを軸に、制服から一歩進め衣服の標準化がもたらす影響を考察する論考を投稿した。

(4) 20世紀：日本製品がアフリカの衣に与えた影響

二十世紀については、日本が繊維製品の輸出大国となったことに注目し、それらの製品が競争相手国や受け入れ側でどのような影響を与えていたのか、東西アフリカを焦点に調査することにした。東アフリカの消費者や市場像を刷新した Jeremy Prestholdt 教授(UC San Diego)を長期招聘し、領事報告・視察団調査・綿業会館史料を中心に日本側の史料整理を行った。さらにヘルモンド(蘭)とマンチェスター(英)に関連資料を発見し、国内データベース作成に協力した。これに関連して三回の国内シンポジウム、二回の国際学会報告を行った。これらを通じて開始前よりも東・南アフリカとの連環がみえ、また戦間期へと射程を広げることができた。戦間期の東アフリカにおいて日本製品がそれまでシャツ生地を変容させ、日本製メリヤス下着の導入とともに「衣のカジュアル革命」を起こしていたことを指摘した。西アフリカのアフリカプリントドレスについては、日本製品がどの価格帯へ参入し、現地生産化に際しとった戦略を明らかにした。概説的な小論を「グローバルヒストリーズ」に著したが、学会報告も行い、年度最後に集めた資料をもとに、さらなる成果を投稿予定である。

(5) 20世紀の衣のグローバル化：スポーツウェアと古着

スポーツウェアは、ヨーロッパ基点ではあるが、その帰属の地域性は薄れ、グローバル性を商品イメージに含めている。アジアのマーケットの役割が大きく、ファッション産業としてはグローバル参入が比較的容易で、日本や中国をはじめとしたブランドも発信性を高めている。スポーツウェアのグローバル化の進行をイギリス・グローバルブランド企業・中国・中東・オセアニア・日本と基点を複層させ、アイテムもシューズ・水着・オリンピック制服と視点を変えて討論した。

最後に、一九九〇年代以降、いっきにグローバル化した古着交易と、繊維廃棄物の再活用(リサイクル)という再流通が生み出す循環にも着目した。本研究では、その全容を明らかにすることよりも、日本を国際的な文脈に位置づけることを優先した。衣服のリサイクル手段のうち、リファッションは、付加価値は高いが小規模でしか実現できないと想定されている。しかし、戦間期から戦後の友禅の染め直しがりファッション品を大量生産・消費を可能にしていたことを論考刊行した。また、21世紀の東京・原宿において、古着街という設定を超えて古着ファッションが場の形成(Place Making)に活用されていることを Translating Second-hand Clothing into 'Realizing Me': Used-Mix Style and Youth Culture in Harajuku などの発表で明らかにした。今日原宿では「偽古着」がファストファッションに対抗する商品として大量展開し、古着にも気軽に親しむ読者モデル、古着店員といったステータスを、若者に憧れるが到達可能な都市居住者のロールモデルとして、メディアや参加者やショップが一体となって提示している。原宿において戦後世界からの古着が吸収され、分類・アーカイブ化され、再循環を可能とさせる商品ロジックを創出できるに至ったことがこの背景にある。冒頭に問題とした非ヨーロッパ基点の衣のグローバル化や、衣の「循環」を見出す立場からも、このような循環が重要である。

5. 主な発表論文等 [雑誌論文](計4件)

1. Miki Sugiura, 'Value', Textile History 50/1, forthcoming August 2019, 査読あり
2. Miki Sugiura, 'The Mass consumption of refashioned clothes: Re-dyed kimono in post

- war Japan in Business History, 61-1, 2018,106-121
<https://doi.org/10.1080/00076791.2018.1494730> 査読あり
3. Miki Sugiura, Editor's Note Alternative Perspectives for Global History of Coffee and Tea, *Journal of International Economic Studies*, 32-2, 2017, 55-59 査読あり
 4. 杉浦未樹「近世商都アムステルダムと商人邸宅街 都市拡大と商人集団の集住をめぐって」*都市史研究*, 山川出版社 115-122 頁, 2017 年 査読無
〔学会発表〕(計 26 件)
 1. Miki Sugiura 2019/3, International Symposium: Textiles and Materiality. Mixing Fibres between East and West, 16th-20th centuries (co-organized with Prof Giorgio Riello and Prof John Styles) Miki Sugiura's presentation 'A Quest for Diversity: Ramie-Hemp Mixed Weave in the late 18th century - early 19th century Japan'
 2. Miki Sugiura 2019/2 International Symposium Globalization of Sportswear. Brand Marketing, Technology and Cultural Agenda c.1880-2010s (co-organized with Prof. Giorgio Riello) Miki Sugiura's presentation: "Globalization of Sportswear. Present state of Research"
 3. Miki Sugiura 2019/2 Wolfson Research Exchange in the University Library, "Selling Her Possessions from Home: Gendered Spheres and Urban Space Formation in 18th Century Cape Town", in *Early Modern Women's Roles and Identities, 1500-1800*
 4. Miki Sugiura 2019/2 Circle of Japanese Art in London: "The King, the Pope, and the Silk Kimono: Global Dialogues in Tensho Boys Embassy's Attire in 1580s", Daiwa House, Daiwa Anglo-Japanese Foundation
 5. Miki Sugiura 2019/1 Round Table History& Design 3: The 18th century Banyans & Casta Paintings (Introduction, Presentations by Prof Rebecca Earle, Dr Adrianna Catena),
 6. Miki Sugiura 2019/1 SOAS Japan Research Center Seminar: "The Mass Consumption of Refashioned Clothes: Redyed Kimono in Post-War Japan", Russell Square: College Buildings, Khalili Lecture Theatre
 7. Miki Sugiura 2018/12 "Economies of Slave Clothing in the 18th century Dutch Cape Colony" in Workshop: Management in Early Stages of Capitalism (co-organized with Prof Giovanni Favero) (カフオスカリ大学 Cafoscari University, Venice)
 8. Miki Sugiura 2018/11 'Proper Red and Blue for Fighting the West. Military Uniforms in 1850s Japan' in International Symposium: Uniformed Reds and Ordinary Blues. Colours and Clothes in Circulations, c1750-1900. (co-organized with Dr Adrianna Catena)
 9. Miki Sugiura 2018/11 "Translating Second-hand Clothing into 'Realizing Me': Used-Mix Style and Youth Culture in Harajuku", in International Conference: Translation Processes in Fashion Studies, Aesthetics & Food Culture : Belgium, China and Japan, University of Antwerp (organized by Dr Chin Ling Pang)
 10. Miki Sugiura 2018/11 "Value", Fifty Years of Textile History. Cloth, Dress and Fashion, 2018 Pasold Conference, ロンドンミュージアム Museum of London
 11. Miki Sugiura 2018/10 Guest Lecture "The Mass Consumption of Refashioned Clothes: Re-dyed Kimono in Post-War Japan"(チューリッヒ大学, Section of East Asian Art)
 12. Miki Sugiura 2018/10 Guest Lecture "Selling from Home. Gendered Spheres and Urban Space Formation in the 18th century Dutch Cape Settlement" (チューリッヒ大学、Colloquium at Global History Seminar)
 13. Miki Sugiura 2018/10 Guest Lecture "Economies of Global Clothes. Slave Clothing in the 18th century Dutch Cape Colony" パリ・ディデロ大学
 14. Miki Sugiura 2018/09 Global Costume. Tensho Boy's Attire in 1580s, Roundtable History & Design 2: Kosode & Banyans: Contested World Views in an Attire c1580-1910, ウォーリック大学
 15. Miki Sugiura 2018/09 UK, Netherlands and Japan selling textiles to Africa, Roundtable History & Design 1: Printed Textiles for West Africa. c1860-1980s. Low Countries, U.K., Switzerland, Japan and their Global Connection, ルーヴァン大学
 16. Miki Sugiura 2018/08 Stratified Clothes, Japanese Entry to East African market and the Shaping of Cotton Fabrics & Wear, 1920-1930s, WEHC, MIT
 17. Miki Sugiura 2018/08 Economies of Slave Clothing. Creation of Cheaper Clothing in the 18th century Dutch Colony, WEHC, MIT
 18. Miki Sugiura 2018/06 Connecting Urban Mobility with the Mobility of Goods, Mobility Summer School,アムステルダム大学
 19. Miki Sugiura 2018/04 Selling her Possessions Home: Women's Agencies in the Formation of Urban Space in 18th Century Cape Town, ESSHC, クイーンズ大学
 20. Miki Sugiura 2018/04 The Reconfiguration of Dutch Textile Industries and Global Connections 1670-1820, ESSHC, クイーンズ大学
 21. Miki Sugiura 2018/03 Secondhand Clothing Culture in Tokyo and Fashion Tourism Development, MUST 18th Anniversary Events, マカオ科技大学
 22. Miki Sugiura 2017/08 Global Costume: Contested World Views, Workshop Connecting

Global Costume and Global Art, 東京大学

23. Miki Sugiura 2017/07 Tensho Boys' Missionaries' Costume invention in 1580s, Global Costume: Kosode, Dofuku, Banyan, Kebaya and Japanese Rok 1500-1850. A dialogue of Global Circulation between Art History, Economy and Material Culture

24. Miki Sugiura 2017/06 Re-dye and Make-over as Promoters of Fashion Industry, Popularizing Fabrics and Clothing: Kyoto Yuzen Industry in Broader Context 1600-1970, 立命館大学

25. Miki Sugiura 2017/06 A Global Costume: Nagasaki's interregional Networks, Material Culture, and knowledge circulation. The Tensho Embassy at the end of the 16th century, Writing for International Readers / Journals Workshop II "History of Dress in Global Perspective、法政大学

26. Miki Sugiura 2017/03/07 Japan and the Netherlands selling African prints in 1960s: Trading structure, Market formation and the Determinants of Price, Third Kansai Workshop on Global Fashion Business "Textile Industry and Fashion Business in the 19th and 20th centuries: International Comparison". 京都大学

[図書] (計 6 件)

1. Miki Sugiura, ' Garments in Circulation: The Economies of Slave Clothing in the Eighteenth-Century Dutch Cape Colony, in B.Lemire and G.Riello eds, Dressing Global Bodies, Routledge, forthcoming 2020.

2. Miki Sugiura, Port Cities and Inland Distribution. Merchants' Functional Divisions between Early Modern Amsterdam and its Hinterlands, in R. Lee and P. McNamara eds. Port Cities and Hinterland, Routledge, forthcoming 2020.

3. Miki Sugiura, Giovanni Favero, and Michael Serruys eds., The Urban logistic network. Cities, Transport and Distribution in Europe from the Middle Ages to the Modern Times, Palgrave, forthcoming, 2020.

4. Miki Sugiura, ed., Linking Cloth/Clothing Globally, Transformations of Use and Value, c.1700-2000, Tokyo: ICES, Hosei University Publishing, March 2019. ISBN 978-4-9910044-0-7

5. 杉浦未樹「アフリカプリント物語 ファッションのグローバルヒストリー」上智大学アメリカ研究所、ヨーロッパ研究所編『グローバルヒストリー入門』2018年

6. 杉浦未樹「布と衣の世界史構築とグローバルヒストリー」羽田正編『グローバルヒストリーの可能性』山川出版社、2017年。

[その他] ホームページ等

<http://www.lccg.tokyo> [糸 布 衣 の 循 環 史 研 究 会]

<https://warwick.ac.uk/fac/arts/history/ghcc/ghccpeople/members/visitingscholar>

<https://warwick.ac.uk/fac/arts/history/ghcc/event/events/roundtablehistorydesign/>

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

6. 研究組織

研究協力者

[主たる渡航先の主たる海外共同研究者]

研究協力者氏名：ジョージオ リエロ

ローマ字氏名：Giorgio Riello

所属研究機関名：ウォーリック大学

部局名：歴史学部

職名：教授

研究協力者氏名：トーマス ダコスタ カウフマン

ローマ字氏名：Thomas DaCosta Kaufmann

所属研究機関名：プリンストン大学

部局名：美術史学部

職名：教授

研究協力者氏名：リンダ イートン

ローマ字氏名：Linda Easton

所属研究機関名：ウィンターサー博物館

部局名：Museum Collections

職名：ディレクター

[その他の研究協力者]

研究協力者氏名：ジェレミー プレストホルド

ローマ字氏名：Jeremy Prestholdt